

クレジットカードの日常的利用と支払いの痛みの関係性

織田 翔月

現代において推し進められるキャッシュレス決済の中でも、クレジットカードは最も隆盛な支払い形態である。これまでクレジットカードに関する研究は多く行われ、クレジットカードの利用が、支払いの痛みを弱めることが示されてきた。本研究における支払いの痛みとは、Zellermayor(1997)によって定義された、金銭を支払う際の心理的な負の反応を指す。従来の研究は、決済時のクレジットカードの利用、つまりクレジットカードの一時的利用に着目しており、消費者がクレジットカードを普段どれだけ使っているかは検討していなかった。しかし、支払いの痛みを軽減するクレジットカード利用を日常的に繰り返すことにより、経験的に支払いの痛みの感じ方が変わることが予想された。そこで本研究では、クレジットカードの日常的な利用が支払いの痛みに及ぼす影響を、研究1、研究2を通して、匿名の質問紙調査で検討した。

研究1では、クレジットカードの日常的利用と支払いの痛みの関係、そして支払いの痛みと貯蓄態度の関係性を調べた。クレジットカードの日常的利用は、クレジットカードを日常的にどれだけ使っているかを頻度の側面と、金額の側面から測定した。また、支払いの痛みはNakajima & Izumida(2015)が用いた10種類の製品画像と価格を呈示して購入場面を想定させ、その支払いの痛みを聞き取った。貯蓄態度は、富永・間々田(1995)の尺度を用いた。調査対象者は男性48名、女性54名、未回答1名の計103名の大学生・大学院生だった。調査の結果、クレジットカードの日常的利用と支払いの痛み、支払いの痛みと貯蓄態度、いずれに関しても有意な関係性は見られなかった。この結果に対し、クレジットカードの利用が支払いの痛みを軽減する効果が今日の大学生にも頑健なものか検討すること、貯蓄態度以外の個人特性を考慮すること、クレジットカードの日常的利用を測定する尺度や支払いの痛みの測定方法の再検討が必要であると考えられたため、測定項目を変更して研究2を行った。

研究2では、引き続きクレジットカードの日常的利用と支払いの痛みの関係性を検討しつつ、新たにその関係を調整する個人特性を探った。さらに、研究1で懸念されたクレジットカードの一時的利用が支払いの痛みを軽減する効果を検証するため、クレジットカードロゴの呈示の有無を条件として設定した。クレジットカードの日常的利用は、金額の側面から測定した。支払いの痛みは、5種類の製品画像(ロゴあり条件、ロゴなし条件)を呈示し、その製品に対して支払ってもよいと考える金額を尋ねた。加えて、個人特性として、浪費家・節約化傾向を測るTightwad-Spendthrift尺度(Rick et al., 2008)と、クレジットカードに対する好意的・非好意的な態度を測るクレジットカード態度尺度(Hyhoe et al., 1999)を測定した。調査対象者は男性106名、女性96名、未回答2名の計204名の大学生・大学院生だった。調査の結果、支払いの痛みに対するクレジットカードの日常的利用の影響は認められなかった。ただし5製品のうち傘を呈示した際の製品価格に対してのみ、クレジットカードロゴの呈示がない場合、もしくはクレジットカードに非好意的な態度を持つ場合、クレジットカードの日常的利用は支払いの痛みを強めた。

本論文の結果は、今日の大学生にとって、クレジットカードの利用が支払いの痛みを弱める効果がないことを示唆していた。加えて、従来の研究により報告されていたクレジットカードの利用と支払いの痛みの負の相関と相反し、クレジットカードによりお金を使いすぎた経験が、支払いの痛みを強める可能性が推測された。今後の研究では、呈示する製品の種類などを系統的に検討することによって、本研究で確認された結果の再現性を確かめること、クレジットカード以外のキャッシュレス決済の日常的利用の効果を調査することが期待される。(安全行動学)